

美ら島沖縄総体 2010 レポート

「晴天届く君の風 みなぎる闘志が夏に輝く」

全国高等学校体育連盟テニス部
常任委員 新居 弘行

<はじめに>

琉球王朝時代より中国や東南アジアとの海外貿易の拠点として栄え、王府として政治・経済・文化の中心地であった沖縄県那覇市。その市内 3 会場において、美ら島沖縄総体 2010 が開催された。大会スローガン「晴天届く君の風 みなぎる闘志が夏に輝く」には、主役である選手たちの思いが大空まで届くほどの勢いを持ち、若さと躍動感あふれる”みなぎる闘志”が輝くようにとの願いが込められている。

<開会式・100周年記念式典>

開会式では、前年度優勝旗、優勝杯の返還の後、沖縄尚学高等学校 志村恵次選手と沖縄県立コザ高等学校 松崎万愛選手が選手宣誓を行った。



全国高等学校テニス選手権大会は今回、明治 41 年の第 1 回大会よりちょうど 100 回を数え、開会式の後 100 周年記念式典が行われた。100 周年記念式典では馬瀬隆彦 高体連テニス部部長の挨拶、盛田正明 日本テニス協会会長の祝辞に続き表彰が行われた。特別功労賞が、永年全国高体連テニス部副部長としてまた 20 年以上にわたって県の専門委員長としてご功労のあった 村上天二氏、永吉洋一氏、矢野智氏、沢野唯志氏、秋田義久氏に授与された。優秀校として、団体戦で 20 年以上連続出場した 男子 愛知県 名古屋高等学校 (21 回連続)、福井県 仁愛女子高等学校 (32 回連続)、長野県 松商学園高等学校 (21 回連続)、神奈川県 湘南工科大学附属高等学校 (20 回連続) が表彰された。



その後行われたパネルディスカッションでは、日本テニス協会 強化本部長 福井烈氏、日本テニス協会 強化副本部長 植田実氏、早稲田大学庭球部監督 土橋登志久氏、元フェデレーションカップ日本代表選



手 浅越しのぶ氏、宮崎商業高校テニス部監督・高体連テニス部副部長 迫田義次氏が「高校テニスで学んだこと」というテーマで、ご自身の思い出話や出場選手へメッセージを贈り、大いに盛り上がった。



<団体戦>

男子ベスト8は次の学校。 秀明英光（埼玉）・相生学院（兵庫）・四日市工（三重）・大成（東京）・名古屋（愛知）・新田（愛媛）・大分舞鶴（大分）・湘南工大附（神奈川）。

第一シードの柳川（福岡）が三回戦で秀明英光に敗れ、第四シードの大成（東京）は準々決勝で16シードの四日市工業に敗れた。準々決勝も接戦が多く、各学校の実力は接近していた。そんな中、準決勝は 秀明英光－四日市工、名古屋－湘南工大附と、昨年と全く同じ対戦となった。

秀明英光 対 四日市工。ダブルスは6-1,6-1で服部・萩（四日市工）が先取。点差ほど実力差はなかったが要所要所を押さえ一時間で終えた。逆にシングルス1は6-4,7-5で秀明英光の大城が中島に勝ち勝敗はシングルス2に委ねられた。後藤（四日市工）対 権（秀明英光）の対戦は、後藤が左利き特有の回り込んでの逆クロスが決まり1stセットを取った。2ndセットはほとんど秀明英光のペース。しかし後半からしぶとさを見せた1年生の後藤がタイブレイクをものにし、決勝進出を決めた。

名古屋 対 湘南工大附戦は、昨年準決勝シングルス1同士の再現 古田（名古屋）対 近藤（湘南工大附） となったが今年も古田に軍配が上がった。スコアは6-2,7-5。その1分後にシングルス2も終了し6-1,6-2で大塚（湘南工大附）が中川（名古屋）を下す。最後に残ったダブルスは、サービスで上回る名古屋 片平・井上が7-6(8), 6-2で今井・松崎に勝ち、決勝進出を決めた。

昨年準優勝の名古屋と三位の四日市工の同地区対決となった決勝のダブルスは、名古屋の片平・井上ペアが四日市工の 服部・萩ペアに対し1stセット第4ゲームをブレイクし、そのまま6-3。2ndセットは0-1から6ゲーム連取した。その10分後、今度はシングルス2で四日市工がポイントを上げる。今大会好調の後藤が6-1,6-3で中川に勝利。日本一をかけた勝敗の行方はシングルス1の古田（名古屋）対 中島（四日市工業） 次第となった。



四日市工 中島選手



名古屋 古田選手

1stセットは第1ゲームを除く5ゲームを連取した中島が6-2で取るが、2ndセットは古田がリードし中島が追う展開で6-3古田。ファイナルセットもお互いの意地とプライドをかけた好ゲームが続いた。古田から0-1,2-1,2-4,4-5,5-6と、1ポイント1プレーで流れが変わるせめぎ合いの中、30-30と中島が勝利まであと2ポイントと古田に迫る。しかし昨年の決勝戦で同じような苦しい試合を落とし優勝を逃していた古田は強かった。続く2ポイントを奪いタイブレイクに持ち込むと、そのタイブレイクも7-2で取り2時間30分に及ぶ戦いに終止符を打った。体力を消耗しベンチで監督からマッサージを受けながら得たの大きな勝利であった。



優勝の瞬間



名古屋高校

女子ベスト8は次の学校。

仁愛女子（福井）、椋山女学園（愛知）、奈良育英（奈良）、園田学園（兵庫）、柳川（福岡）、浜松西（静岡）、岡山学芸館（岡山）、富士見丘（東京）。東海・近畿が2校、関東・北信越・中国・九州1校と、昨年同様全国的に分散した形になった。

4シード全てが出そろった準決勝は、園田が仁愛女子を壮絶な戦いの末2-1で下し、富士見丘が2-0で柳川を下した。決勝戦は選抜に続き富士見丘と園田学園の対戦となった。

決勝戦、シングルス2 富士見丘の伊藤が、園田学園の真田を寄せ付けず6-2,6-0で快勝し1ポイントを上げる。このときダブルス 森・池田（富士見丘） 対 山本・村上

(園田学園)は富士見丘から6-5、シングルス1 江口(富士見丘) 対 田中(園田学園)は富士見丘から3-6,3-2であった。そのシングルス1は2ndセット江口3-0リードから田中が3-3まで追いつくが、江口がその後3ゲームを2ポイントしか落とさず流れをつかんだ。ファイナルセットに入って田中も踏ん張るが足にケイレンを起こし、思うようにプレイができない。結局江口が6-2で取り、選抜に続く優勝を決めた。ダブルスは富士見丘から7-6(2),2-5で打ち切られた。



富士見丘高校

<個人戦・シングルス>

男子ベスト8は次の選手。丸数字は学年。李在紋②(茨城・東風), 河内一真①(兵庫・相生学院), 鈴木大介③(東京・東海大菅生), 後藤翔太郎①(三重・四日市工), 上原伊織③(兵庫・甲南), 綿貫敬介②(東京・大成), 小野陽平③(岡山・関西), 近藤大基③(神奈川・湘南工大附) 関東4名, 近畿2名, 東海1名, 中国1名。またベスト16には1年生6名が残った。

決勝戦は今大会ノーシードから勝ち進み, 準決勝で河内との1年生対決を制した後藤と, 準々決勝, 準決勝で近藤, 綿貫の関東勢を破った小野との対決となった。



関西 小野選手



四日市工 後藤選手

決勝戦の重圧からなのか, 前日までのショットに比べ切れ味を欠く後藤に対し, 小野は相手のバックにボールを集めたりスライスをうまく用いて, 少しずつ流れを引き寄せ, 1stセットを6-2で取る。2ndセットも安定したストロークに加え要所所で攻め, 最後まで相手に主導権を渡さず6-0で完勝した。岡山県の男子では初となる優勝である。準優勝の後藤は, 伸びのあるフォアを武器に1年生ながらノーシードから決勝まで勝ち上がった。勝負度胸もあり優勝も期待されたが3年生の落ち着いたプレーを前に涙をのんだ。

女子ベスト8は次の選手。

美濃越舞③（千葉・秀明八千代），山本みどり③（兵庫・園田学園），伊藤夕季②（東京・富士見丘），田中桃子③（兵庫・園田学園），江口実沙③（東京・富士見丘），菅村恵里香③（福井・仁愛女子），布目千尋③（和歌山・慶風），今西美晴③（京都・京都外大西）。
関西4名，関東3名，北信越1名。

決勝は2年連続で勝ち進んだ美濃越と，選抜個人戦覇者で第2シードの今西，を破り勝ち進んだ布目との対決となった。



慶風 布目選手



秀明八千代 美濃越選手

1stセット，強打で責め立てる美濃越が4-1と一気にリードした。しかし相手のスピードやコースに慣れてきた布目のミスが減り，ラリーが続きだすと今度は美濃越のミスが増え，布目が7-5で取った。2ndセットにはいってもサーブの確率が落ちる美濃越に対して布目は安定した試合運びを見せ，相手に付け入る隙を与えなかった。このセットを6-0で取り優勝を決めた。美濃越は前半力を発揮し一時リードを広げるもあとがうまく続かず，2年連続の準優勝に終わってしまった。しかしながらそれも立派な成績。今後に期待したい。



<個人戦・ダブルス>

男子ダブルスベスト4は次の選手。綿貫 敬介②守谷 総一郎①（東京・大成），蜂谷翔希③松森 裕大③（千葉・東京学館浦安），林 奕倫③鈴置 朋也③（岡山・岡山学芸館），石井 開③小堀 良太①（東京・大成）。その中でも，ベスト4まで2ペアが勝ち進

んだ大成高校勢の活躍が光った。

決勝に進出したのは綿貫・守谷と林・鈴置。ストローク力の綿貫・守谷に対してネット際でのボレー・スマッシュが光る林・鈴置との戦いになった。1stセット互角の戦いの末、遂にタイブレークへ。まず林・鈴置ペアが6-3とセットポイントを迎えたが、ここからミスが続き結局10-8で落としてしまう。2ndセットも流れに乗った綿貫・守谷の勢いは止まらず6-3でものにし、日本一に輝いた。



大成 綿貫・守谷ペア

女子ダブルスベスト4は次の選手。江口 実沙③伊藤 夕季②（東京・富士見丘），菅村 恵里香③下道 愛里紗③（福井・仁愛女子），池田 玲②森 美咲①（東京・富士見丘），山本 みどり③村上 亜利沙③（兵庫・園田学園）。同じくベスト4まで2ペアが勝ち進んだ富士見丘高校勢の活躍が光った。

決勝に進出したのは江口・伊藤ペアと山本・村上ペア。ストローク力で優位に立つ江口・伊藤ペアが試合を優勢に進め1stセット7-5。2ndセットも相手の前衛の裏をかくサイド攻撃やアングルショットを決め、このまま押し切るかに見えたが、園田ペアは気迫のこもったプレーを続け6-3で奪い返した。ファイナルセットは、時折降る激しい雨での中断やコート変更の中で行われた。前衛と後衛がしっかりとした戦術をもって機能し始めた山本・村上が、少しずつ確実に流れを引き寄せ、6-3で取り優勝を決めた。中断も含め3時間に及ぶ戦いであった。



園田学園 山本・村上ペア

<おわりに>

場所は沖縄。コート上はとてつもなく暑くなるだろうと覚悟を決めていたが、幸いにも天気は曇ったり小雨が交じったりと本州より気温の低い日も多く、最初の覚悟よりは「良いコンディション」であった。しかしながらとてつもなく暑い日があったのも事実で（初めて見る霧吹きが内蔵されている扇風機にお世話になった。），そんなときには1日多い大会日程や、激しいスコールとともに「沖縄」を実感させられた。



男子団体はベスト4が昨年と同じ顔ぶれとなり、女子団体戦では選抜に続き富士見丘が

優勝した。男子個人戦ではシングルス優勝、ダブルス準優勝の岡山県勢の活躍やダブルスベスト4に2ペア入った大成高校勢の活躍が光った。女子個人戦シングルスでは関東・関西勢の活躍、ダブルスではベスト4に2ペア入った富士見丘高校勢の活躍が光った。

そんな中、観客の記憶に残るシーンが一つある。

女子団体準決勝 園田学園ー仁愛女子。ポイントは1ー1となり、勝敗は最後のシングルス1にかかった。そのシングルス1、山本(園田学園)対菅村(仁愛女子)の戦いが終わった直後のことである。敗れた菅村選手がベースライン付近で四方に向かって四回、深々と頭を下げた。スコアは6-2,2-6,7-5。

お互い持てる力をすべて使い果たした激闘で、最後に残ったものは「お世話になったすべての方への感謝の気持ち」であったと後に彼女は語ってくれた。2人の戦いと彼女の行動にすがすがしくも奥深い感動を覚えた。



仁愛女子 菅村選手

補助員たちも明るく朗らかで、今大会の成功に向けて元気いっぱい頑張ってくれた。

「イチャリバ チョーデー」。ある女子生徒が教えてくれた言葉の意味は「一回合えば誰でも兄弟」。なるほど、人なつっこい補助員や、細やかな気配りが随所で感じられる運営の先生方の奥にはこういう文化が流れていたのか、と納得した瞬間でもあった。

お世話になったすべての方々へ感謝申し上げ、レポートを締めくくりたい。

